

## 第十講 レポートの講評と歴史学と大学の教育・研究体制

レポートの講評：過去の記憶と歴史、そして国民国家の関係について考えなさい。

### 1. レポートの構成

過去の記憶

個人の記憶



集合化された記憶



探求・物語・・・記憶の集合だけでは歴史にならない



歴史・・・探求と物語・事実



国民としての単一意志の形成



多言語から単一言語へ＝国語の形成



ジャーナリズムによる単一言語化



国民国家の形成



国民への帰属意識の形成



歴史教育を通しての帰属意識の共有

### 2. ポイント

記憶：

なぜ人は記憶を残そうとするのか

記憶を残すのは忘却への恐れ

人は常に過去の記憶を持って生きている。つまり「過去と現在と未来の自己同一性」を、自己アイデンティティを根拠として「自分」自信を生きている。

記憶とは何か

過去の思い出

象徴化された記憶と集合化された記憶

集団の中に生きる感情

断片的人により記憶は異なる

記憶の機能

記憶における統合化の機能→集合化された記憶・象徴化された記憶の形成

記憶の問題

記憶における批判の欠如

記憶に批判は必要ではない（歴史には批判が必要）

記憶と歴史の関係：

歴史と記憶はイコールではない

記憶そのものは歴史ではなく、歴史のすべてが記憶ではない

歴史は記憶の一部

記憶と歴史は異なる

記憶と歴史は相反

歴史：

過去に対する積極的な行為（記憶の受動性に対する歴史の能動性）

歴史とは過去の記憶を意図的に残そうとする

大きな権力の下で忘却される記憶の記録歴史は作られる

（歴史の反自然性）

歴史のよって立つ位置

大事なのは事実

過去の記憶からなる

集合化された過去の記憶を扱う  
歴史を歴史たらしめるもの  
刻み込まれた記憶は歴史になる  
事実を集めただけでは歴史は語れない  
歴史には物語が必要  
探求  
正しい歴史であるためには、真偽の判断が必要  
解釈する行為  
歴史にはストーリーが必要  
記憶が歴史になる過程  
研究と討論により記憶は歴史になる  
歴史家は歴史を語る  
歴史家集団による集合的な事実認定  
歴史を学び、認知するときに言語化や差別化の過程が必要  
歴史の問題点  
歴史の客観性と普遍性  
歴史は一つの物語でしかなく、記憶と歴史がリンクして真実を物語っているわけではない  
事件のどこを切り取るかで解釈が全く異なってしまう  
歴史も正確ではない

国民国家：

国民国家の統合機能

近代とは多言語から単一言語への統合を始める  
自己アイデンティティ形成に近代国家の影響  
国家の望む自己アイデンティティ  
言語の統一  
単一言語による国民意識の形成  
国家の単一意志を表わす  
教育は多様な民族を統合するのに使われる

教育を通して国民の知識が統一される

19世紀はネイションを高く評価する傾向

ネイションはその正統性を「国土」「国民」の伝統と歴史に求める  
文化・言語・記憶・歴史の統一化によって国民国家が生まれた

## 国民国家と歴史

過去の記憶と歴史の共有によって国民国家は形成された

誇らしい歴史を共有する人々の共同体として国民国家は形成

国民国家形成の為に歴史を利用

国民国家にとって歴史は必要

過去の記憶と歴史があったからこそ国民国家は生まれた

過去の記憶と共有することによって国民国家が形成された

望まれた過去

歴史は自己アイデンティティを確立するために重要

国民意識を作り上げる

歴史や過去の記憶は人民の互酬的共同体への復帰や、民族自決への原動力として利用

ナショナリズムを高めるために利用

国家に与えられた歴史のイメージ

国民意識を獲得するのに歴史は大きな役割を担っている

国の利益を追求するために歴史を都合よく解釈する

多数の歴史家のまとまった見解＝正しい歴史、という固定観念

これからどの方向を目指していくのか

違った価値観の人々の流入は国家の文化的アイデンティティを脅かす危険性がある（多民族・多文化）

国民国家の概念が絶対ではない→国民国家の歴史とは別の歴史の存在

文字を持たない社会の歴史の可能性

## 第十講 歴史学と大学の教育・研究体制

### 歴史学におけるギルド体制の伝統

日本の大学：ドイツのベルリン大学をモデル

講座制：正教授を頂点とし、助教授・講師・助手・学生のピラ

ミッド構造

ゼミナール演習による教育

価値観の共有

ドイツにおける教授団ギルドの形成

教授資格試験

異分子のふるい落とし

社会的出自の均質性：プロテスタント・中流市民層

研究領域・研究方法の均質性：外交史

共通の価値観と方法論

歴史学の政治性

保守的自由主義

国内では政治的中立

対外的には国民主義

### 文化史学と歴史学との葛藤

歴史学の一元主義

19世紀：歴史学とは外交史であった

大学文学部史学科の歴史学と経済学部の経済史・法学部  
の法制史の併存

内政史や経済史などの排除

これらは歴史学以外の学問領域で研究

経済史は経済学の分野

大学の教員としての地位をすでに有している研究者に  
よって

ブルクハルト：バーゼル大学の教授・美術史の方法を活

用・美術や思想の様式的変化を比較し、時代ごとの特質を解明

ランプレヒト：ライプチヒ大学総長・法則性を重視。

中世経済史

ウェーバー：フライブルク大学・ハイデルベルグ大学正教授、経済学

ホイジンハ：ライデン大学総長